

成果報告書

令和7年度「白川茶存続計画策定プロジェクト」

2026年01月26日

-
1. 背景・目的
 2. プロジェクト概要
 3. 事前調査
 4. 現状分析
 5. 戦略検討
 6. 計画策定

背景

- 白川茶は400年以上の歴史を持ち、平成20年に地域団体商標登録された「美濃白川茶」は白川町の象徴的な特産品である。
- しかし、近年は生産者の高齢化と収益性低下により、町内の茶園面積は平成25年比で49%減（R5 / 54.7ha）、茶生産組合は半減（R5 / 8→4社）するなど、茶産地として危機的な状況を迎えている。

目的

- 本プロジェクトは、統計データでは見えない現場の「生の声」を拾い上げ、産地の維持に向けた3カ年のロードマップを、地域一体となって策定することを目的とする。

現場の声を起点に茶業と地域の不可分な課題を構造化。官民が肩書きを越えて対話する地域共創会議を通じ、需要創造に向けた具体案と、3カ年のロードマップを作成。

	取組内容	目的
1 事前調査	✓ 現場の「生の声」に基づいた、統計データには現れない産地のボトルネックの抽出。 ✓ 白川町・白川茶の魅力、課題、および将来に向けた「兆し」となる情報の収集。	✓ 現場へのヒアリングを通して産地の課題を抽出するとともに、統計データには現れない白川町と白川茶に対する課題認識と地域資源の魅力を発掘するため。
2 現状分析	✓ ヒアリング結果に基づく「地域課題の構造化マップ」の作成と茶業および地域課題の因果関係と共通点の整理。 ✓ ペースレイヤリングを活用した地域資源の可視化と地域関係者と取組状況の整理。	✓ 茶業衰退の原因を可視化するとともに、茶業単体ではなく、地域資源を掛け合わせた「面」でのアプローチの必要性を検討するため。
3 戦略検討	✓ 全3回にわたる、行政・民間・茶業者が一堂に会する「地域共創会議」の企画・運営。 ✓ ツーリズム・教育・リブランディングなど、需要創造に向けたプロジェクト案の策定。	✓ 「産地存続」に対する当事者意識と共通認識を醸成し、地域全体での価値創造に向けたプロジェクトへと発展させるため。
4 計画策定	✓ 共創会議での合意事項を反映した「白川茶存続3カ年ロードマップ」の作成。 ✓ 自律的・継続的に戦略を実行するための「白川茶未来協議会」の構想案の整備。	✓ 一時的なプロジェクトで終わらせず、地域が自律して動き出すための実効的な指針を示すため。

本プロジェクトは、官民の垣根を超えた多様なステークホルダーによる地域一体の推進体制で実施。

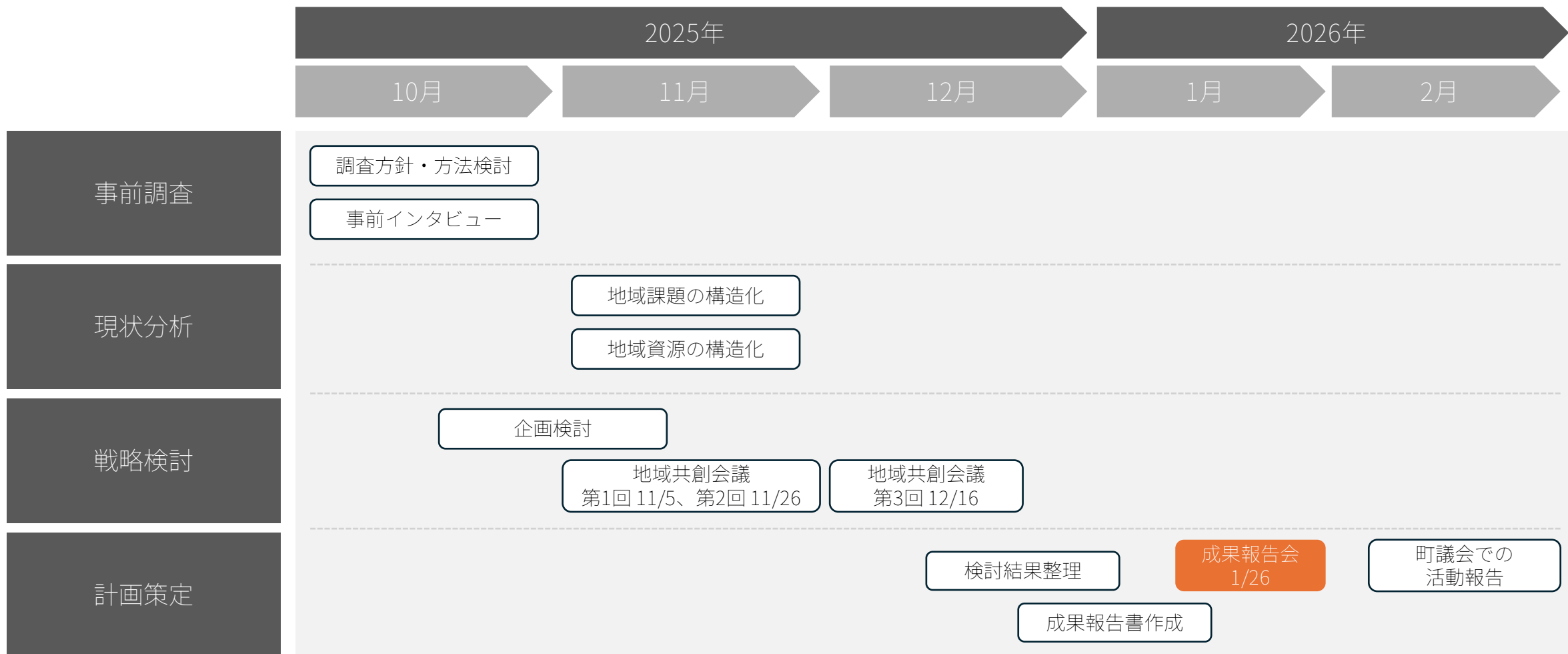
プロジェクト運営

事業主体	
有限会社白川町農業開発・ 白川町特産品振興センター	✓ 本プロジェクトに関する地域内（行政・民間）でのコミュニケーションおよび連携
PM	
株式会社TeaRoom	✓ 茶業および地域関係者を対象とした事前調査 ✓ 地域共創会議の企画・運営 ✓ 成果報告書の作成
パートナー	
株式会社FabCafe Nagoya	✓ 本プロジェクトに関する企画・運営補助 ✓ 地域共創会議におけるアドバイザー業務 ✓ 成果報告書の作成補助

プロジェクト関係者

茶業関係者
・ (株)ますぶち園 田口 常昭様、各務 泰則様 ・ (有)新田製茶 新田 哲也様 ・ 中野茶生産組合 今井 和秀様 ・ JA佐見茶生産組合 田口 裕和様 ・ (株)菊乃園 渡邊 和重様 ・ (株)白川園本舗 藤井 清蔵様 ・ (有)緑香園 田口 秀人様 ・ 茶舗 美濃香園 藤井 浩様 ・ 米田園 藤井 太平様 ・ (有)白川町農業開発 藤井 松太郎様、吉田 友和様
地域関係者
・ 白川町 農林課 安江 宏行様 ・ 三川茶生産組合兼町議会議員 伊佐治 優様 ・ 白川茶伝承教室兼町議会議員 佐伯 好典様 ・ 白川病院 野尻 基様 ・ クウスムデザイン 塩月 洋生様 ・ 和ごころ農園 伊藤 和徳様 ・ 白川町地域おこし協力隊 安井 理緒様 ・ 白川町特産品振興センター 渡辺 憲正様、田端 大聖様、坂野 秀様

現場の声を起点に白川茶および白川町に共有化される課題と兆しを構造化し、官民共創による地域共創会議を通じて、実践的な計画策定を行った。



1

事前調査

Preliminary survey

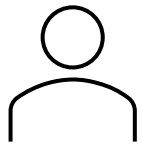
白川茶のボトルネックと未来の兆しを特定するため、官民・多世代の垣根を超えた11名の茶業・地域関係者を対象としたヒアリング調査を実施。

目的	1	現場の一次情報収集 異なる立場から見た白川茶のボトルネックを抽出する	2	白川茶産業の深掘り 白川茶と関連する地域課題を構造的に捉える	3	兆しの整理 地域資源および移住者をはじめとする新たな取組の整理
	実施方法			調査対象者（計11名）		
	実施形態	オンラインでの個別ヒアリング			行政・町議員	- 白川町役場 渡辺様 - 町議会議員 伊佐治様 - 町議会議員 佐伯様
	調査時間	1対象者あたり約60分			茶業関係者	- ますぶち園 田口様 - 佐見茶生産組合 田口様 - 新田製茶 新田様
ヒアリング項目	- 白川町の魅力と資源（自然・人・文化・風土） - 町全体の共通課題（人口・インフラ・地域意識） - 白川茶の現状とボトルネック（生産・流通・ブランド） - 未来に向けた提言・必要とされるアクション			移住・起業	- クウスムデザイン 塩月様 - 和ごころ農園 伊藤様 - 地域おこし協力隊 安井様	
				医療・生活	- 白川病院 野尻様(現代表) - 白川病院 野尻様(先代)	

白川茶の存続には、古いしがらみを排した柔軟な発想と販売戦略の構築が必要との声が多い。そして茶の衰退を町の衰退と捉える、地域全体の当事者意識が不可欠であることが分かった。

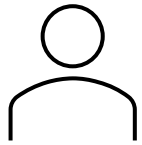
	ポジティブな意見	ネガティブな意見	得られた示唆
 茶業関係者	✓ 「白川茶」という町名と一体とブランド名であり、基幹産業として地域を支えてきた。 ✓ 厳しい自然が育む高い品質と香りが多くの消費者を魅了している。	✓ 一部地域（佐見、広野地区）は傾斜地のため機械化が困難。 ✓ 特に生産者は茶栽培で見込める収入は50-100万程度であり、中期的な継続は極めて困難な状況。	✓ 川上（生産者や共同工場）が疲弊する中で、茶事業単体の所得向上は困難ではないか。地域内の他機関や団体他との連携が必須となると考えられる。
 地域関係者（地元住民）	✓ 都市部（名古屋）からも車で1時間程度でありながら、豊かな自然と濃密な人間関係が息づく地域で、都会では経験できない温かさがある。	✓ 一部、行政依存による主体性の欠如（上げ膳体質）が残っており、地域から新たな取り組みが生まれてこない。 ✓ 若者の働く場所が不足している。	✓ 白川町のアイデンティティである白川茶存続滅危機にあるという共通認識を地域全体で持つことが重要なのではないかな。
 地域関係者（移住者）	✓ 地域外からの移住者も寛容に受け入れ、有機農業をはじめに、チャレンジしやすい環境が整備されており、行政との距離も近い。	✓ 生産者・茶商間の「縦割り構造」により、生産・販売が有機的な繋がりを生めていない。	✓ スペック（品質）での競争だけではなく、茶産業に関わる人や地域性を含むナラティブを通じた価値伝達が必要なのではないかな。

生産、販売、ブランディング（魅せ方）、地域リーダーの不在など、地域内には多くの課題認識がある。産地としての限界を間近に体感しており、再生に向けた一歩目が不明確な状態であった。



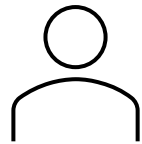
茶業関係者A

佐見、広野地区は傾斜地が多く、地域全体でみると、乗用型機械の導入が半分以下の土地でしかできない。深刻な高齢化と相場下落による赤字経営が最大の課題であり、来年の茶時期も人手が足りない。



茶業関係者B

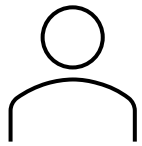
「静岡の経済連のような業界を牽引する公的機関（リーダー）が不在。相場に左右されず、自分で値段をつけて売る経営への転換が重要だ。



茶業関係者C

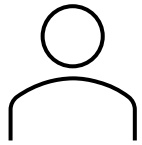
露出が下手で、町内でも白川茶をアピールできる拠点が不足している。お茶業界の最大の課題は、生産者・工場・茶商間の『縦割り構造』。情報交換の欠如が生産者の意欲低下に繋がっている。

「人任せ」な体質脱却と主体的関与が不可欠。古いしがらみを排し、柔軟な発想を持つ人材による販売戦略の再構築が急務であり、茶の衰退が町の消滅に直結する、との共通認識の情勢が必要ではないか。



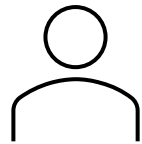
地域関係者A

過去の強力な施策により住民が『上げ膳』状態だった歴史があり、人に任せがちな体質がある。地域からの主体的な取組が生まれ、継続される状態が構築されない限りは、お茶事業単体で何とかすることは非現実的ではないか。



地域関係者B

「お茶産業の課題は『古いしがらみ』と『出口戦略のなさ』。移住者をはじめに地域資源を活用したサウナやボルダリング、お茶ピクニックなど、柔軟な発想で事業を考えられる人材が必要だ。



地域関係者C

白川茶の最大の課題は『販売戦略』の欠如。お茶がなくなれば町のアイデンティティが失われる。最も必要なのは白川茶がなくなってしまうたら、『町も消滅危機にある』という共通認識を持つことだ。

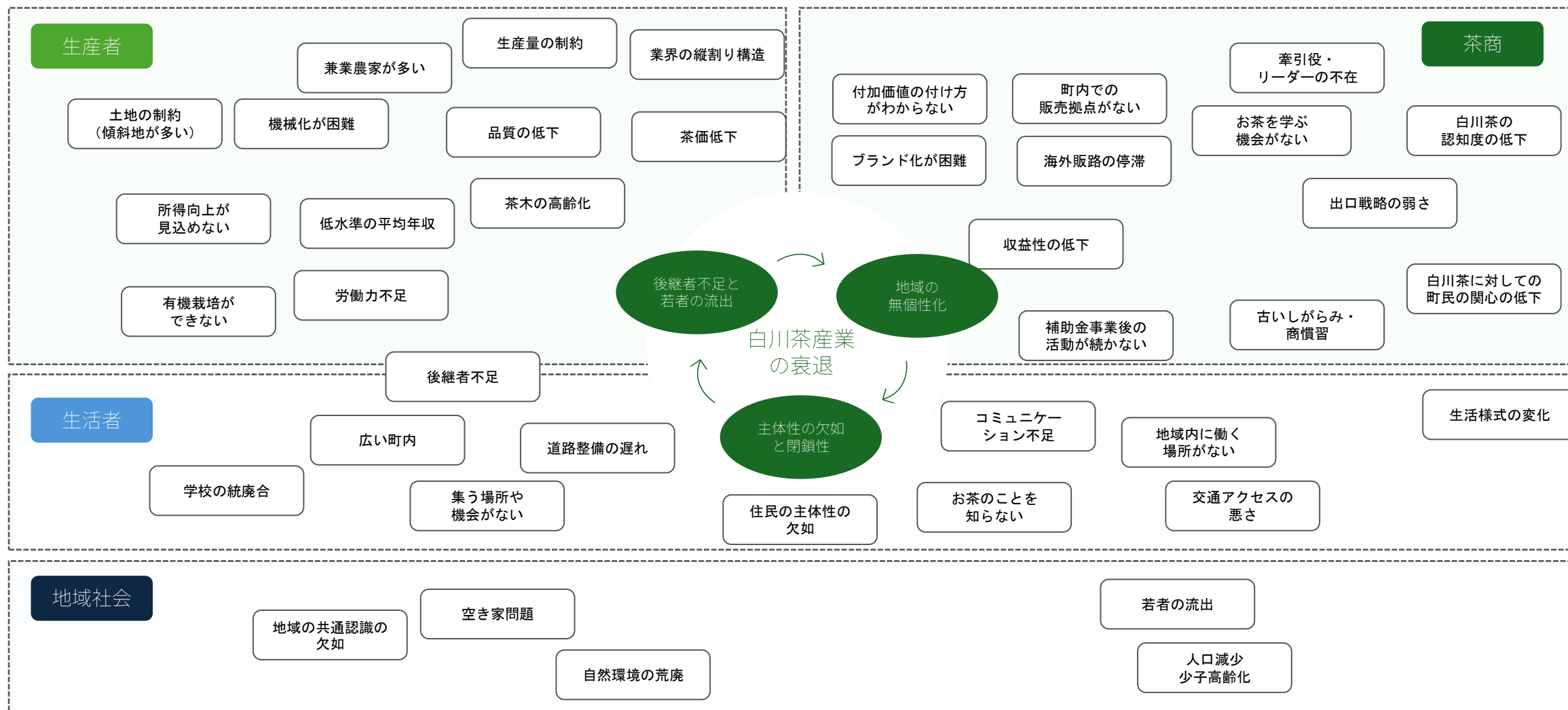
2



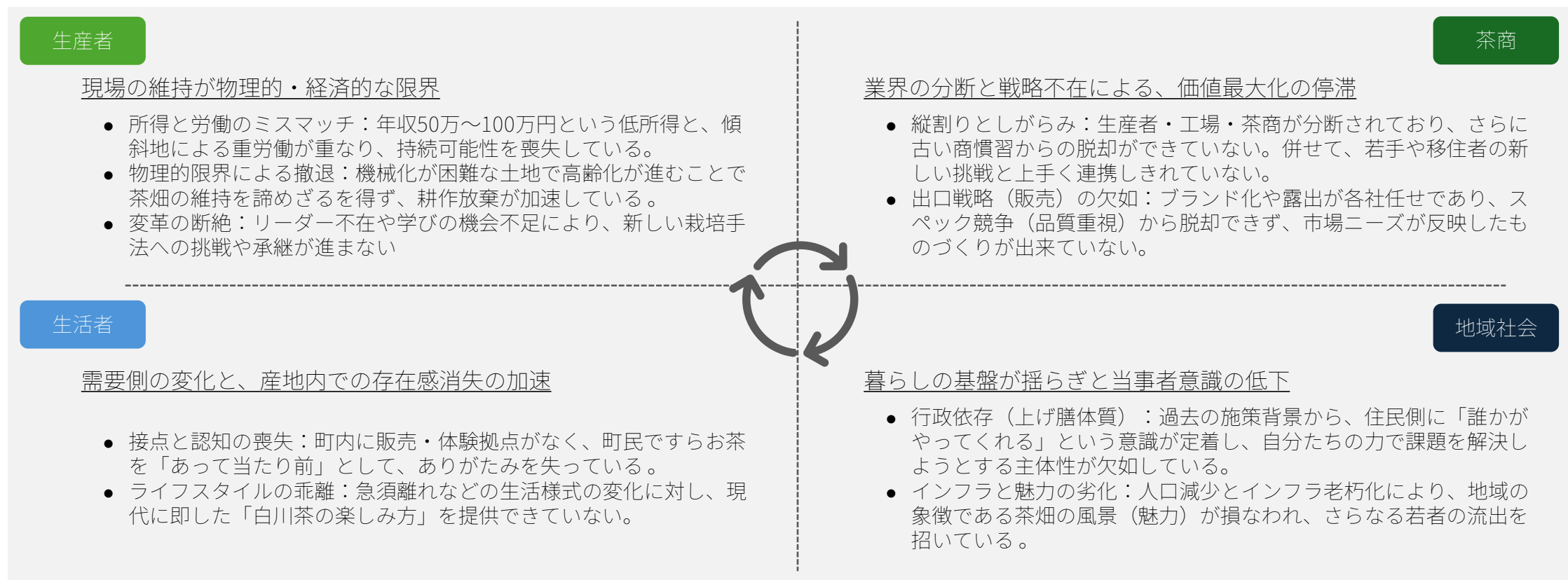
現状分析

Current State Analysis

白川茶産業の衰退要因を、生産者、茶商、生活者、地域社会の4つの視点で整理。後継者不足や収益性の低下、地域コミュニティの希薄化などが相互に影響し、産業の活力が失われる悪循環が生まれている。



白川町と白川茶の課題を構造的に捉えることで、生産者、茶商、生活者、地域社会が抱える課題が共有化されていることを確認。地域内で負の連鎖が発生し、産業と暮らしの両面で衰退が進んでいる。



白川茶の課題は、生産者や茶商だけでなく、
白川町に住む全員の暮らしの問題と共通化している

白川町の有用な地域資源および新たな取組を整理。白川茶の課題の解決に有用であると考えられる、農業インターンやサウナなどの存在を確認できた。

カテゴリ	要素				
FASHION 流行	お茶ピクニック (ツーリズム)	サウナ	ボルダリング	農業インターン・ ワーケーション	
COMMERCE 商業・ビジネス	白川茶 (味・香り・渋み)	鮎釣り	東濃ひのき	有機農業	白川茶 伝承教室
INFRASTRUCTURE インフラ・基盤	茶匠会	茶業振興会	移住交流 サポートセンター	ゆうき ハートネット	ワークドット 協同組合
GOVERNANCE 行政・政治	白川町役場	特産品 振興センター	白川町 農業開発	地域おこし 協力隊	
CULTURE 文化	茶文化・手揉み	地歌舞伎	行商	黒川鉦山	パイプオルガン
NATURE 自然	清流・ 綺麗な川	里山・森林	茶畑	中山間地	

お茶と地域資源の掛け合わせにより、この地域ならではのナラティブを前提とした戦略構築ができ、経済性と社会性が両立させた白川茶および白川町の振興ができるのではないかと

3

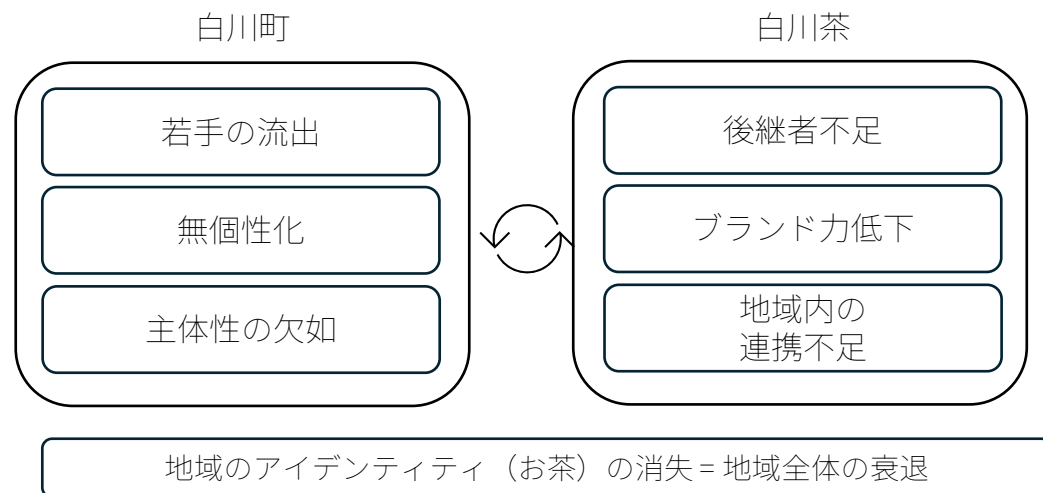


戦略検討

Strategy Formulation

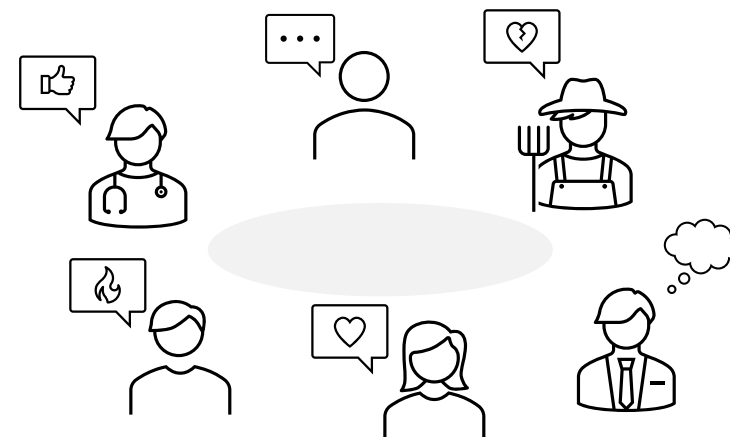
事前調査により、白川町と白川茶には重なり合う課題が多く、官民の垣根を超えて茶業・非茶業が集い、地域が一体となった対話の場が必要と考え、地域共創会議を企画・実行することとした。

前提



事前調査および現状分析の結果、地域と茶業の課題は共通化されており、地域課題として面的なアプローチが必要であるという仮説が立った

検討方法



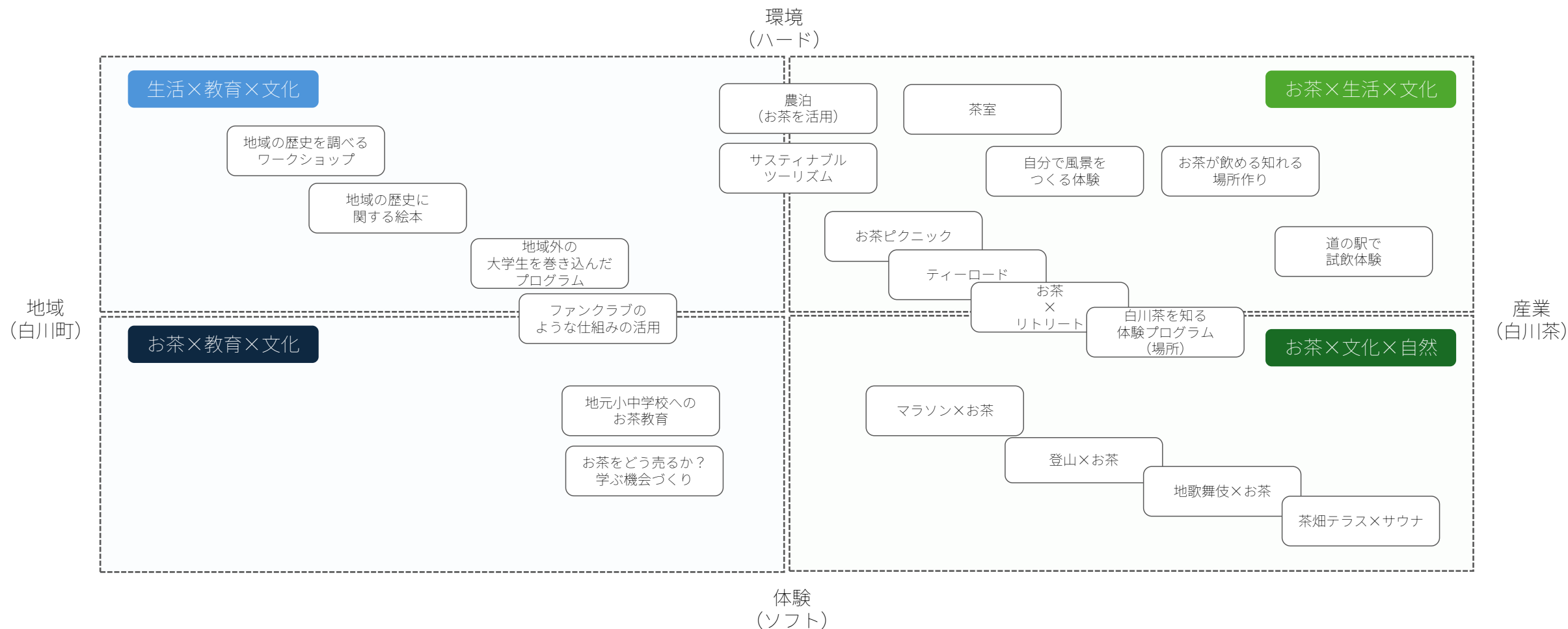
地域のアイデンティティであり、地域再生における最大のレバレッジである白川茶の未来に継ぐため、行政・民間、地元・移住の垣根を越えて、共に議論を行う場づくりが重要なのではないかと

地域が一体となった対話の場が必要（地域共創会議）

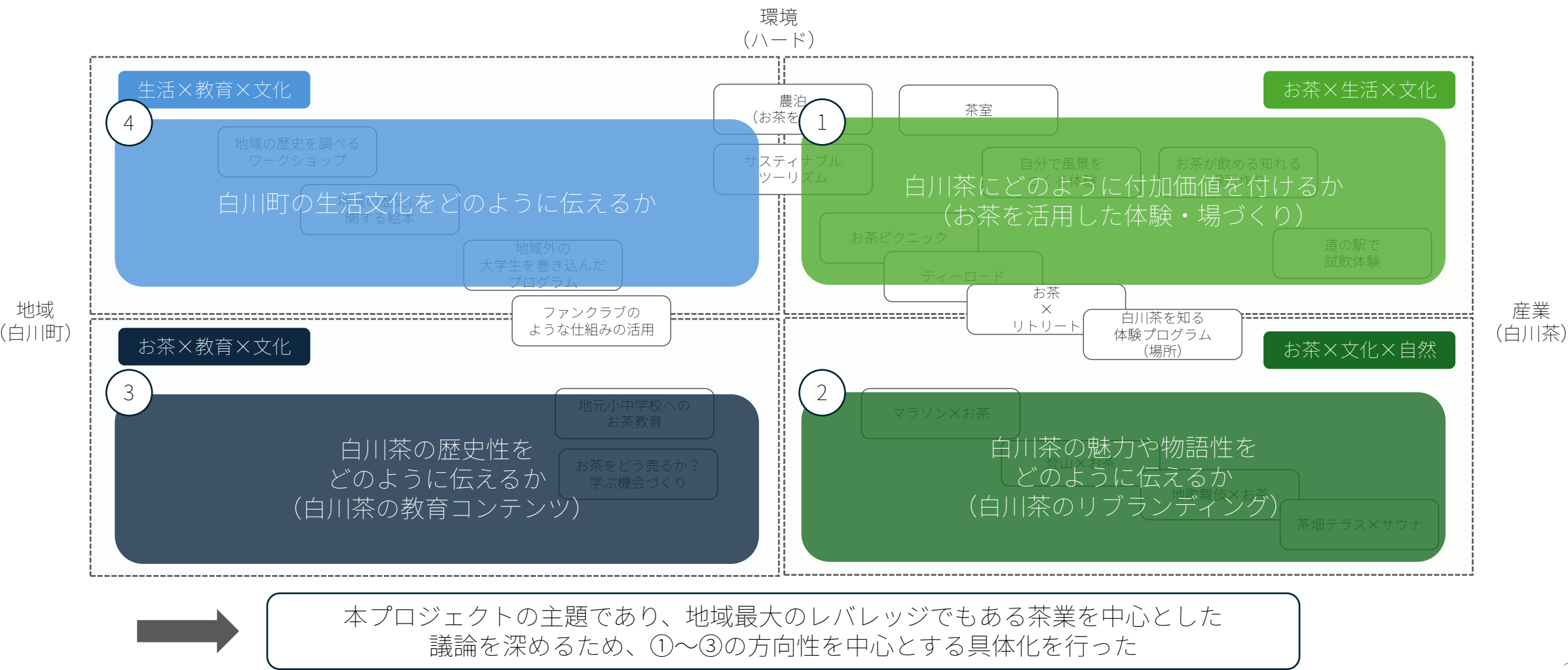
全3回の地域共創会議では、白川町・白川茶の課題と兆しに関する共有認識を醸成するとともに、白川茶の生産・販売体制に関するアイデアや地域内での連携体制に関する対話を行った。

	第1回	第2回	第3回
			
テーマ	白川町と白川茶の現在地を知り、 未来への兆しを見出す	白川茶の未来をつくる「初めの一步」 4つのアイデアを 「未来のアクション」に変える	白川茶に残された時間と 未来を本音で語る
参加者	特産品振興センター、白川町農業開発、白川町役場、白川町議員、共同工場、茶商、手揉み保存会、 白川病院、さとやまデザインファーム、地域おこし協力隊 など		
実施日	2025年11月5日	2025年11月26日	2025年12月16日
実施場所	白川町民会館	白川町役場 別館	白川町役場 別館

白川茶と地域資源の掛け合わせによって生まれる取組を、対話を通じて発想。お茶を主とするアイデアを地域・産業、環境・体験の4つの切り口で整理した。



白川茶を持続的な産業として発展させるためには、地域が一丸となって川下からの需要創造を行うことが重要であるという意見に集約された。



白川茶の付加価値向上を目指し、耕作放棄地や労働力不足の解消に向け、お茶ピクニックやVR体験等を提供。地域内外の連携で関係人口を増やし、交通や受入態勢の課題解決を目指す方向性。

1

白川茶にどのように付加価値を付けるか（お茶を活用した体験・場づくり）

プロジェクト名： 白川へGO！

What (何をするか)	● お茶ピクニック × α（サウナ、リトリート、ボランティア等） ● 茶工場見学や、VR・ARを活用したデジタル体験（スタンプラリー形式など）
Why (なぜやるか)	● 現状の「耕作放棄地」や「労働力不足」を、観光客やボランティアを巻き込むことで解決したいという狙い ● 3年後には「お茶を目的（ターゲット）に来る人が増える」「新しい関係人口が定着する」ことを目指す
Who (だれとやるか)	● 地域おこし協力隊や移住者、町内の若手グループ、および外部パートナーとの連携 ● スマートステーションやピアチェーレといった既存拠点の活用
When/How (いつ・どのように)	● お茶ピクニックの開拓や、繁忙期の「お茶サポーター」募集などのスケジュールを検討 ● 障壁として、移動手段の乏しさ（交通アクセス）、マナーの問題、受け入れ側のキャパシティ不足が懸念される

品質重視から「人を推せる」ブランディング路線を検討。認定ブレンダーや茶リスト等の専門人材を育成するとともに、産地内のプロ不在や後継者不足を課題とし、3年後の魅力発信や拠点確立を目指す方向性。

2

白川茶の魅力や物語性をどのように伝えるか（白川茶のリブランディング）

プロジェクト名： お茶伝導師の育成

What (何をするか)	● 品質重視から「人を推せる」ブランドへのシフト ● ブレンダー（合組のプロ）などの専門人材を育成する
Why (なぜやるか)	● 白川茶全体の魅力が十分に伝わっておらず、現状では「お茶そのもの」の良さが生かせていないという課題意識 ● 3年後には「白川茶の魅力を広く伝えられる人がいる」「あのブレンダーがいるからお茶を飲みたいと言われる」状態を目指す
Who (だれとやるか)	● ブレンダー養成、町独自の「認定ブレンダー」制度の構築 ● バリスタならぬ「茶リスト」や「ティーソムリエ」といった、現代的で親しみやすい呼称の検討
When/How (いつ・どのように)	● 各種ブレンダー研修やカリキュラム作成を経て、育成拠点の立ち上げを計画 ● 障壁として、現在の産地内にプロのブレンダーが不在であること、生産者の高齢化や後継者不足が挙げられている

親世代や子供への「食育・伝承」を推進。お茶を淹れる習慣の欠如を打破し、学校教育や行事を通じて次世代へ継承。指導者の高齢化等の課題を克服し、家庭にお茶がある未来を目指す方向性。

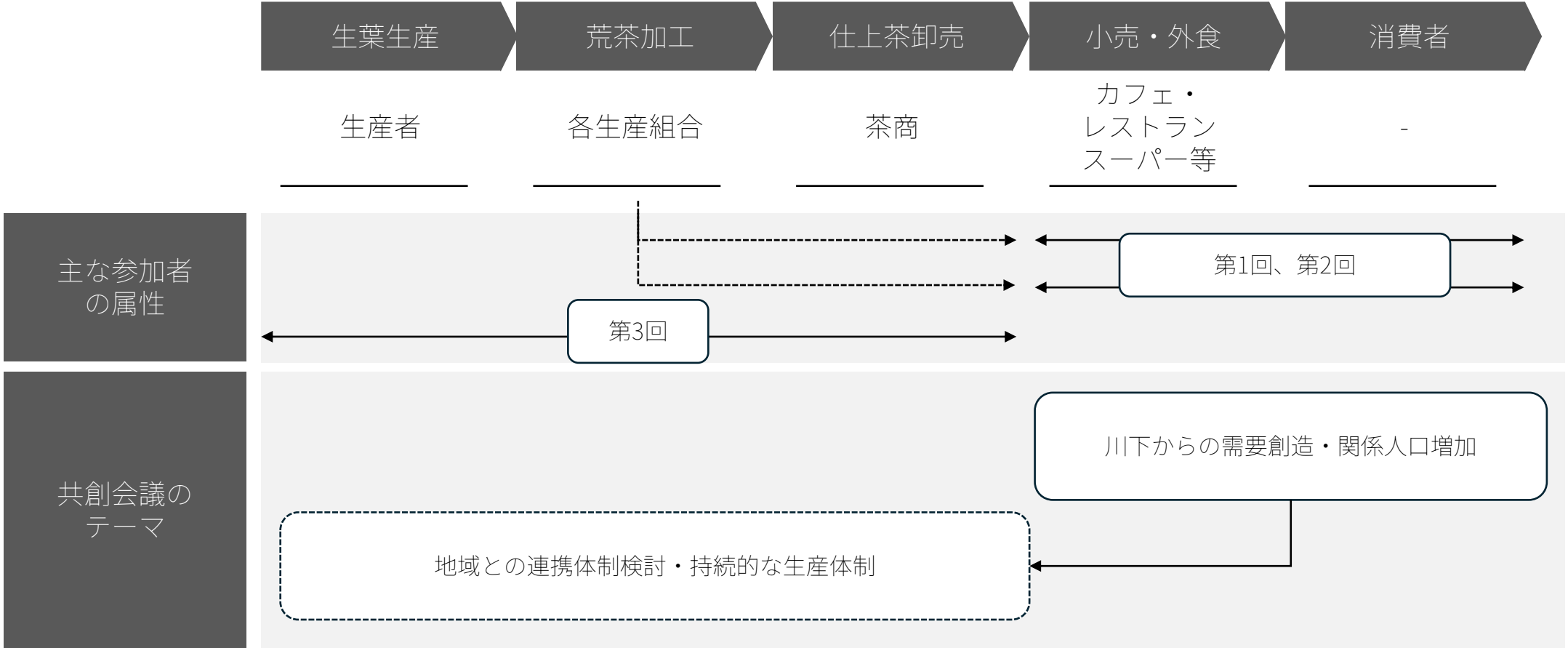
3

白川茶の歴史性をどのように伝えるか（白川茶の教育コンテンツ）

プロジェクト名： 親世代や子供たちへの「食育・伝承」

What (何をするか)	「親世代にお茶を好きになってもらう」ための機会作り（生活への浸透） - 次世代（子供）への伝承プログラムの構築
Why (なぜやるか)	「お茶を淹れる習慣がない」「小・中学校での接点が少ない」という現状の打破 3年後には「子供たちがお茶を淹れるのが当たり前」「お茶が家庭の真ん中にある」状態を目指す
Who (だれとやるか)	- 手もみ保存会、茶業振興会などの既存組織と連携 「伝道師（人材）」の活用や、学校教育への本格的な組み込みを検討
When/How (いつ・どのように)	5月のお茶摘み体験や、7月の親子茶道教室、10月の文化祭展示などの年間行事案 - 障壁として、指導者層の高齢化や、教育現場（学校）のカリキュラム調整の難しさが想定される

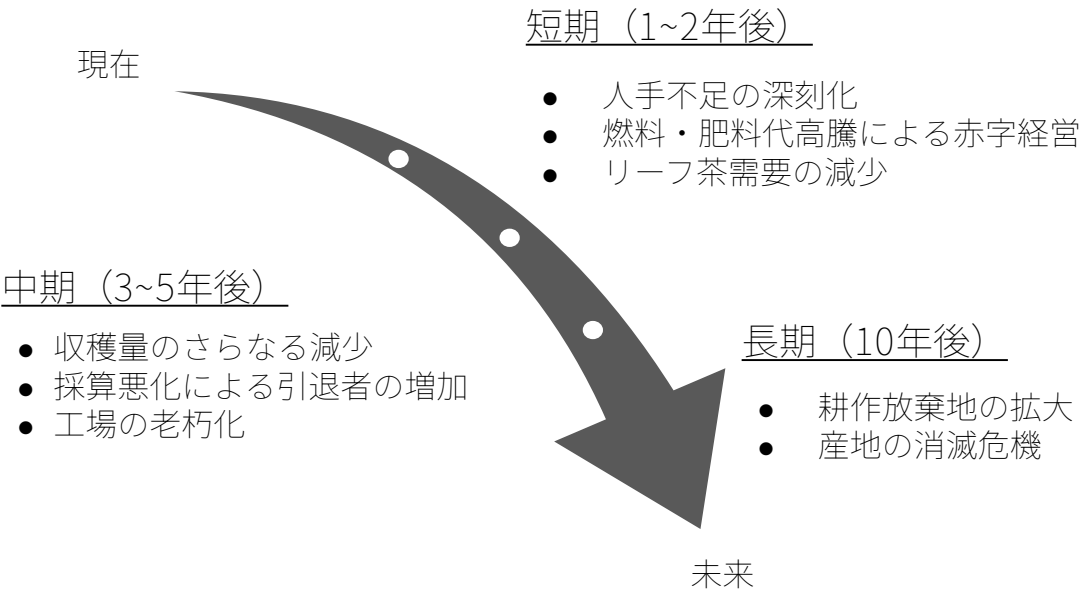
需要創造の議論を加速させる一方、産地の核である茶業関係者との連携定義が不十分。茶業者の本音を抽出し、地域内の連携ポイントを整理するため、茶業者を中心とした第3回目の地域共創会議を実施。



持続可能な生産環境の構築を目指すため、茶業者が生産に専念できるよう、PRや茶時期の人手確保、付加価値創出を地域に委ねる役割分担を明確化した。

白川茶の未来年表

守る領域と頼る領域



カテゴリ	茶業者が守る領域	地域へ頼る領域
生産・技術	● 美味しい茶葉の栽培 ● 製造技術の継承	● 茶時期の人手確保
品質管理	● 工場の稼働維持 ● 仕上げ加工の品質管理	● 新商品の企画・デザイン ● PR、ブランディング
流通販売	● 既存のお茶卸売	● 海外クライアント対応 ● イベント時の集客 ● 付加価値創出

川上の限界を直視しつつ、茶業関係者が生産に専念できる環境を
地域関係者全体で支えることの必要性を確認できた

対話の有用性と包括的推進組織の必要性を確認できた。今後は川上への直接的な支援だけでなく、地域が一体となり、川下からの需要創造への戦略転換することが重要なのではないか。

1

「対話の場」の有効性と継続の必要性

- ✓ これまで地域内に、行政・民間・茶業・非茶業のプレイヤーが肩書きを超えて一堂に会し、対話をする場は存在しなかった。
- ✓ 共創会議を通じて、立場の異なるプレイヤー間での「共通認識」の醸成と、新たな「兆し」の発見が可能であることが実証された。
- ✓ この「共創の熱量」を一時的なものにせず、持続的な対話プラットフォームとして固定する必要がある。

2

「包括的推進組織」の不在

- ✓ 地域課題（人口減少・主体性欠如）と茶業課題（後継者不足・収益性低下）は密接に連動しているが、これらを横断的に取り扱う組織・団体が町内に存在しない。
- ✓ 既存の組織は縦割り構造にあり、地域全体を「面」で捉えた多角的なアプローチ（ツーリズム×教育×リブランディング等）を実行する機能が不足している。

3

「川下からの需要創造」への戦略的転換

- ✓ 物理的制約（傾斜地）や深刻な高齢化により、川上（生産・加工・流通）に対する直接的な支援だけでは産地の維持は限界に達している。
- ✓ 地域資源（自然・文化等）と白川茶を掛け合わせ、川下（消費者・住民）の需要と体験価値を創造することで、逆流的に川上の収益性を高める「地域一体の攻め」が必要である。

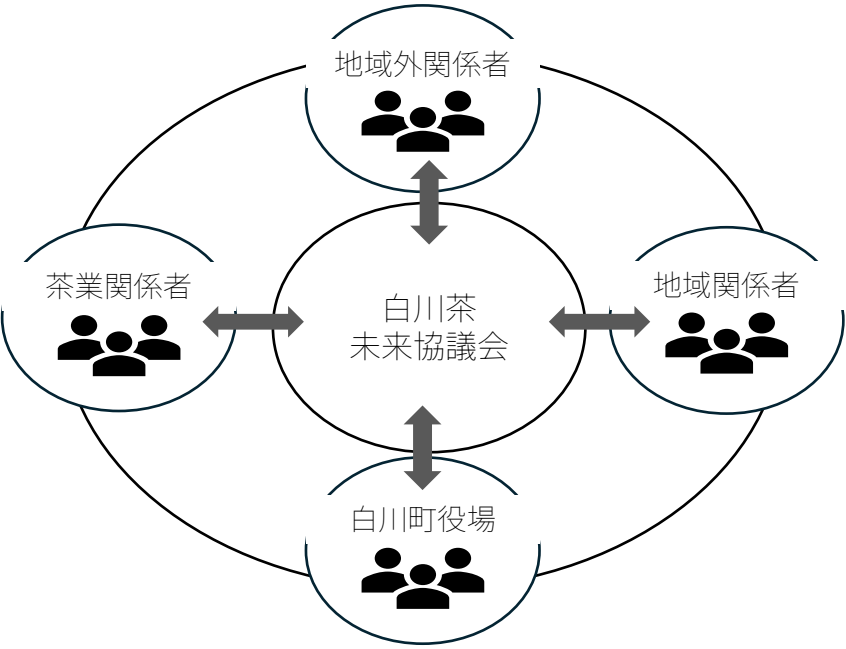
4

計画策定

Roadmap Development

本年度の活動を通して、地域そして茶業の課題を面でアプローチする包括的推進組織として「白川茶未来協議会」の設立が必要だと考え、設立に向けた準備を推進中。

白川茶未来協議会のイメージ



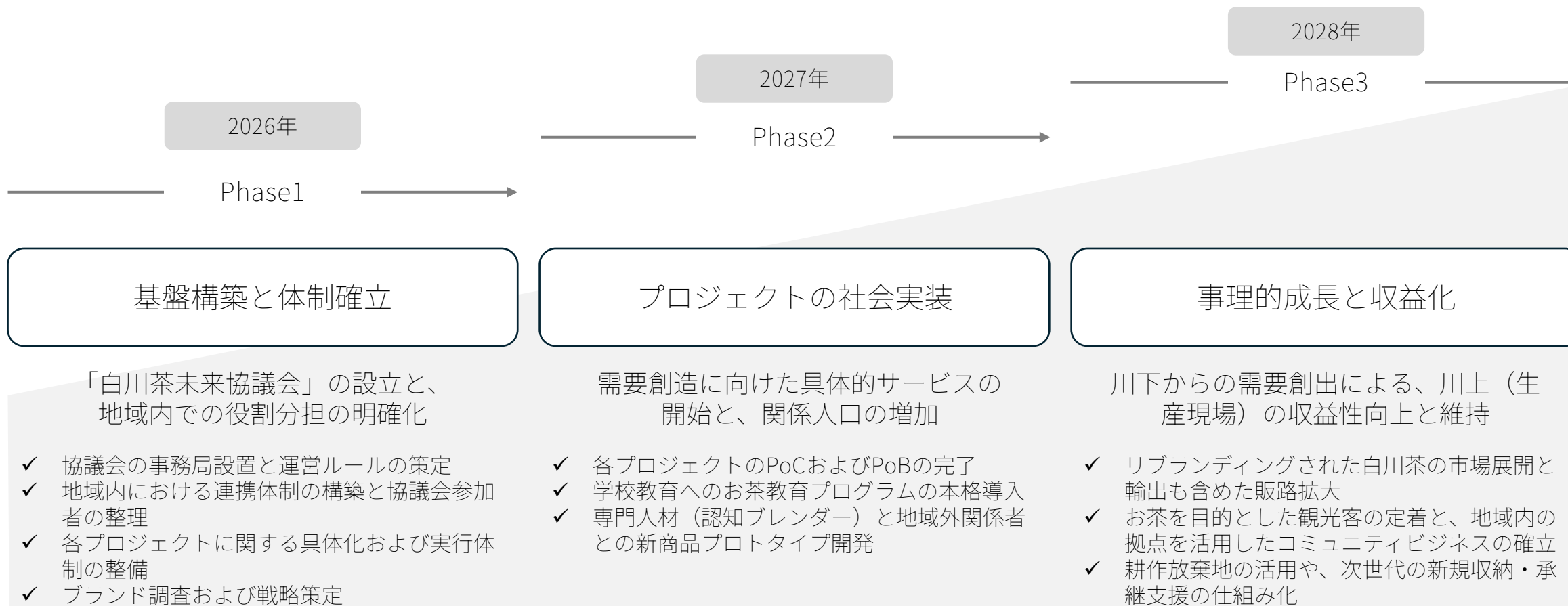
概要

目的	✓ 行政・民間・茶業者・移住者などの多様なプレイヤーが、肩書きを超えて対話と実行を継続する「持続的な対話プラットフォーム」として機能させること。 ✓ 既存の縦割り構造を打破し、地域全体を「面」で捉えた多角的なアプローチ（観光×教育×ブランド）を統括すること。
役割	✓ 川下（消費者）からの視点で、お茶ピクニックやリブランディングなどのプロジェクトを推進する。 ✓ 茶業者が「生産」に専念できるよう、PRや人手確保、新商品企画を地域側で担う体制を構築する。

目指す姿

白川茶未来協議会を中心として、
地域全体で白川茶の振興に関わる取り組みを推進すること

1年目に協議会の基盤構築と戦略策定を行い、2年目にサービスの実装や教育導入を推進。3年目には市場展開や観光定着を通じ、収益化と持続可能な体制確立を目指す。



今年度から協議会設立に向けた準備を進め、4月以降は産地支援、需要創造、教育・文化それぞれのテーマのプロジェクトを推進予定。

	協議会設立		プロジェクト具体化と仮説検証				次年度計画策定			
	2026年 1~3月		4~6月		7~9月		10~12月		2027年 1~3月	
組織運営	協議会設立準備： 事務局設置案と 運営ルールの整備		白川茶未来協議会 発足： 官民連携による意思決定 体制の稼働		活動開始： 観光・教育・ブランド 各チームの担当者選定		会員拡大： 地域住民・企業への 参画呼びかけと連携強化		年度振返り： 次年度（Phase 2）に 向けた事業計画の確定	
産地支援	人手不足対策の策定：5月 の茶時期に向けたサポー ター募集計画		お茶サポーター試行： 外部人材（大学生や地域 内企業等）による 茶生産現場支援		課題抽出： 人手確保の結果検証と 継続的な受入体制の検討		仕組み化： 次年度の安定確保に 向けた登録制度の準備		募集準備： 2027年度春に向けた 広報活動の開始	
需要創造	プロジェクト案の精査： 共創会議で発案された アイデアの具体化および 優先順位づけ		市場調査と戦略策定： リブランディングの方向 性とターゲットの確定		PoC準備： 体験プログラム（お茶ピ クニック等）のコンテン ツ開発		PoC実施： 観光客を対象とした 実証実験の実施		戦略確定： 実証結果に基づく 本サービスの仕様決定	
教育・文化			伝承プログラム試行： お茶摘み体験等を通じた 次世代との接点作り		教材開発： 親世代・子供向け教育コ ンテンツのプロトタイプ 作成		学校での試行導入： 地元小中学校での 授業実践と効果検証		本格導入準備： 次年度カリキュラム への組み込み完了	

